

第2章 プログラムの実施体制

第2章 プログラムの実施体制

はじめに

本プログラムの一番の特徴は、千葉大学の教育学研究科と他研究科の院生とが共に学び、協働して教材を開発してASEAN諸国に赴き、子どもたちに教育活動を行う「ツイン型派遣」である。科学研究に強みを持つ院生と教育実践に強みを持つ院生との協働が、ASEANでの教育体験の中で化学反応を起こし、グローバル感覚を持った教員と教育マインドを持った研究・技術人材という異なる2つの人材育成をめざす。

両分野の院生はそれぞれの強みをいかし、先端科学トピックを取り上げた授業開発を行う。その際に、日本文化や日本語について再考を促すグローバルジャパンカリキュラムを受講する中で、ASEAN諸国の子どもたちに科学技術を通して日本を伝える授業へと発展させる。

本章では、このようなプログラム実施の基盤となる全学実施体制、プログラムの質保証システム、安全管理体制について説明する。

1. 全学実施体制

本プログラムの実施に際し、ツインクルオフィス、国際教育センター、インターナショナルサポートデスクが連携して渡航前安全教育を含めた危機管理を支援する。また、ASEAN諸国の連携大学は、関連する小中高校との実施調整を担当する。さらに現地での様々なサポート活動は引率教員とASEAN諸国にある千葉大学IECオフィスのスタッフが協働して行うとともに、現地コーディネーターを起用する。これらの全学規模での取り組みによりツインクルプログラム実施により、教育学研究科を含めた千葉大学全体の国際化が大きく前進すると期待される。

千葉大学全学体制での実施とASEAN協力組織



図 本プログラムの全学体制

2. ツインクルプログラムの質の保証

本プログラムの実効性を担保するために、新たにグローバルジャパンカリキュラムを開設し、プログラム参加学生の意識の明確化、受講メリット確保、成長の評価が確実に出来るよう配慮している。プログラム実施のために千葉大学は5つの手段で質の保証を行う。

1) グローバルジャパンカリキュラムの開設

本カリキュラムは渡航前教育、現地での教育体験、事後評価で構成された、大学院生・学部生を対象とした特別授業である。

表 グローバルジャパンカリキュラムの詳細

グローバルジャパンカリキュラム 1 Semester		
渡航前講義 (8単位)	現地活動 (4単位)	活動評価
授業開発 授業実践英語 I・II 日本語・日本文化	科学・実験授業 日本文化紹介	修了 発表会

渡航前教育としては院生がペアで授業開発を行うための授業研究、外国語能力向上を目指す授業、現地での教育活動のための日本語・日本文化教育を実施する。その後学生は ASEAN 諸国の小中高校での教育インターンシップを行い、ASEAN 諸国での活動成果について帰国後報告会において発表し、その内容を評価する。さらに外国語力の達成度を TOEIC により測る。この結果、グローバル

人材として十分な能力ありと認められた学生に対し、受講証明を発行する。

2) 柔軟性をもったコース設定

ツインクルプログラムでは計3パターンのコースが設定されている。派遣期間が2週間のトライアルコースおよび1か月のショートコースを設定することで、より多くの学生がこのプログラムへの参加に挑戦することを可能にしている。さらに、トライアル・ショートコース経験者がより広がりのある、現地での教育体験、研究活動のために挑戦する6ヶ月間のロングコースを設けている。

3) アカデミック・リンク・センターを活用したアクティブラーニングの実施

本プログラムでは本学のアカデミック・リンク・センターと連携し、自由な学習空間、学習のためのコンテンツ、人的サポートを組み合わせた新しい学習環境の下、アクティブラーニングを主体としたカリキュラムを編成している。受講学生が主体的に現地文化、教育準備活動に取り組むことで、現地での活動成果の高まりが期待される。

4) 実践的英語教育プログラムの拡大

グローバルジャパンカリキュラムでの英語教育に加え、千葉大学が開発したコンピュータを用いた学習システム「CALL」、常に生きた英語に触れられる空間、イングリッシュハウスを活用しグローバル人材としての英語力を高める。

5) 教員養成開発センターの開設

教員養成開発センターは、プログラム実施責任母体として開設され、現職教員と大学教員から構成されている。学校現場の知見と研究分野の知見を融合させ、学生の指導や評価にあたる。

3. ASEAN 諸国連携大学との連携体制

本プログラムに参加を表明している ASEAN 諸国の連携大学は、インドネシア、タイ、ベトナム、カンボジア、シンガポール、いずれも各地域のトップ校である。さらにこれら連携大学とは順次 MOA(Memorandum of Agreement)の締結を進め、プログラム実施の安定化に努めている(2014年3月現在、インドネシアの連携大学5校とは締結済み)。

○千葉大学海外校友会、在籍している外国人教員、海外IECオフィスが、それぞれ現地協定校等の現地ネットワークを駆使して活動先を確保、また海外協定校の附属学校も活用
⇒ 既に活動先として約20の小中高校を確保済み

インドネシア

インドネシア大学
バンドン工科大学
ガジャマダ大学
ウダヤナ大学
ボゴール農業大学

歴史ある伝統校



インドネシア教育省及び協定大学担当者会議
2012年12月20日ウダヤナ大学にて

タイ

チュラロンコン大学
マヒドン大学
カセサート大学
キングモンクット工科大学
トンブリ校



ベトナム、カンボジア

ベトナム国家大学ハノイ
教育大学
王立ブノンペン大学



王立ブノンペン大学学長、副学長、
理学部長との交流協定調印および実施会議

ナンヤン理工大学
国立教育研究所

シンガポール



図 連携大学一覧および各連携大学との会合

4. 学生派遣時の指導と危機管理体制

本プログラムでは、プログラムの実効性を高め、受講学生の学習効率を高めるために十分な指導と安全管理が図れるよう人員を配し、万全の体制をとっている。

現地の支援体制としては、インドネシアのIEC（International Exchange Center）オフィスには専任スタッフがおり学生の活動を支援している。さらに本プログラムでは、各連携大学にコーディネーターを配置し、本学の担当教員と綿密に連絡を取り合いながら、いかなる状況に対しても対応可能な体制を整えている。さらに、特にトライアル・ショートのパイロット派遣期間は多くの学生が渡航するためツインクルプログラム担当特任助教が現地での生活・安全面を含め直接指導を行う。また、日本からは指導教員がテレビ会議システムにより教育指導を行い、教育の質を保証する。

また学内では、学生の派遣・活動状況に際し、教育学部ツインクル緊急体制により学生の不意の事故や体調不良に対応するとともに、ISD（International Support Desk）が情報の一元管理を行い、迅速で的確な支援体制を取っている。これらに加え民間会社による危機管理システム「OSSMA」の活用によりセキュリティ管理の一層の強化を図る。

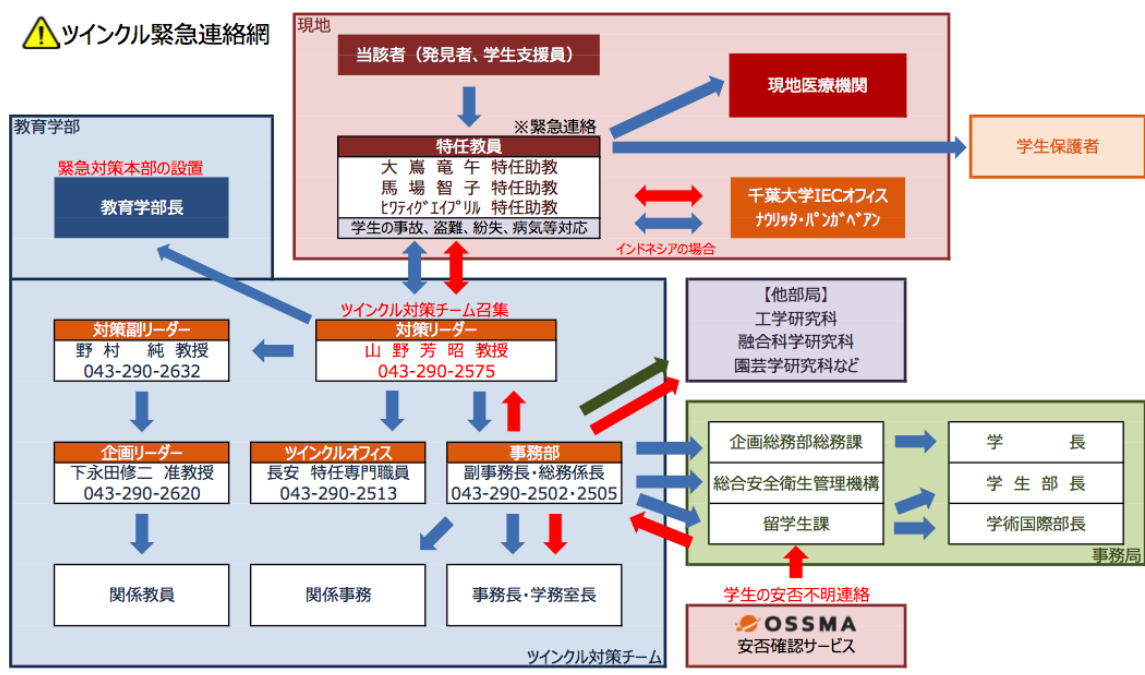


図 ツインクル緊急連絡網（全学および学部内の連携体制）